

## 縄文時代のイヌ — その役割を中心に —

山田 康弘\*

### はじめに

人と動物との関わりは、過去の人間生活を考える上で欠かせない項目である。その中でもイヌは最古の家畜であり、常にコンパニオン・アニマルとして注目されてきた。日本でも多くの縄文時代の遺跡からイヌの骨が出土し、当時の人とイヌの関係が次第に明らかになってきている。イヌの飼育形態と役割を明らかにすることは、当時の生業や精神文化を復元する鍵となる。今回は、過去に発表された縄文次代のイヌの役割と飼育形態についての研究を概観し、弥生・古墳時代の資料と比較しつつ、私見を織り混ぜながら、私なりのデザインを描いてみたい。

### 縄文時代のイヌの研究史概観

縄文時代の貝塚からイヌが出土することを最初に記録したのはE. S. モースである[Morse, E. S., 近藤・佐原訳 1983 : p. 47]。モースは1879年に出版した「Shell mounds of Omori」の中で出土した動物遺体としてイヌを挙げているが、このイヌの骨の出土状況については触れていない。文中に列記しただけのところをみると埋葬例ではなく、おそらく散乱した状態で、破片が出土したのであろう。しかし、縄文時代にイヌがいたことを指摘した点は重要である。

1904年には田中茂穂が千葉県堀之内貝塚からイヌが出土したことを報告しており[田中 1904 : p. 114]、縄文時代にイヌがいたことを学会がすでに認知していたことがわかる。

不確実ではあるが、イヌの埋葬例の出土を最初に記録したのは江見水陰である。江見は『地中の秘密』の中で千葉県余山貝塚からキツネの骨を一体分掘り

※筑波大学歴史・人類学研究科

だしたと記述している[江見 1909 : p. 233]。しかし、江坂輝弥は現在までに狐の埋葬例は報告されていないことから、イヌをキツネと誤認した可能性が高いとしている[江坂 1970 : p. 6]。もし、そうならば、これをもってイヌの埋葬例発見の嚆矢とすることができる。

その後、1919年に鹿児島県出水貝塚からイヌの骨が出土し、これを発掘した濱田耕作は、当時の人々がイヌを食用に飼育していたと考えた[濱田他 1921 : p. 19]。獣骨の鑑定を担当した長谷部言人も濱田の「食用説」を支持している。この時点で、すでに縄文時代の人々がイヌを飼育していたと考えられており、その役割も、貝塚中から骨が散乱した状態で出土することから食用であったと考えられていたことがわかる。しかし、この「食用説」の論拠はかつてモースが唱えた食人説の論拠とさほど変わるところがなく[Morse, E. S. 近藤・佐原訳 1983 : p. 49~54]、当時の考古学の方法論的限界を感じる。

縄文時代のイヌが埋葬されている可能性を初めて指摘したのは長谷部言人である。長谷部は1924年に『人類学雑誌』40-1に発表した「日本石器時代家犬に就て(追加)」の中で、福島県三貫地貝塚より山内清男が採集したイヌの骨がほぼ1個体分遺存していたことから、埋葬されていたと推定している[長谷部 1924 : p. 5]。この時点で長谷部が「食用説」を撤回したかどうかは、不明である。

清野謙次は1925年に『日本原人の研究』を出版し、貝塚より完全なイヌの骨格を発掘したことがたびたびあったことを記している[清野 1925 : p. 293]。これらのイヌは埋葬例であったと思われるが、具体的な記載がなく、詳細は不明である。

その後、1936年に香川県西ノ谷貝塚で初めて確

実なイヌの埋葬例が出土した [土岐・竹下 1936 : p. 34~38]。このイヌは長径80 cm, 短径40 cm, 深さ65 cmの楕円形の土壙に埋葬されていたことから、土岐と竹下は「路傍に横死せる野良犬の骨を、態々持ち来って、貝塚中に埋葬したとは思われぬから、恐らくは、彼等貝塚積成人と、その起居を共にした、家犬の遺骸を埋葬したもの」とし、本例をもって初めて縄文時代のイヌが家犬であったことが証明されたと記している。しかし、その役割や飼育形態については触れていない。出土した土器の図版には、黒浜式と諸磯 a 式土器があることから縄文時代前期の埋葬例であったと判断できる。

1942年には山内清男が『民俗文化』3-8に「石器時代の犬小屋」を発表し、イヌも元来は人と同じように埋葬されたものであったと指摘し、散乱骨は後世になんらかの営力によって移動してしまったものであるという見解を示した。さらに、モースが提唱した食人説がマンローによって反対された事例を挙げ、イヌにおいても同様として「食用説」を否定した。そして、当時の人々が狩猟民であり、埋葬例が存在することから、イヌは狩猟の好伴侶であったとして、「獵犬説」を提示した [山内 1942 : p. 6]。

1951年に文化財保護委員会が愛知県吉胡貝塚を発掘し、埋葬されたイヌが10例出土した。骨の鑑定を担当した長谷部言人は「当代当所の住民はこれらの小形犬を専ら狩猟の為に愛育し、その斃死したとき、人を埋葬すると同じ地域に埋葬するを常としたと推定される」として「食用説」を撤回し、イヌが獵犬であったと「獵犬説」を改めて掲げ、人の墓域内にイヌが埋葬されたことを指摘した [長谷部 1952 : p. 147]。

その後、イヌの骨の出土例は増加し、1961年に酒詰伸男が集成した段階では全国836箇所貝塚のうち、126箇所イヌの骨が出土している [酒詰 1961 : p. 226]。

イヌの骨出土例が増加するとともに、イヌの埋葬例も多く出土するようになった。1957年に出版された『考古学ノート』2 縄文時代の中では、江

坂輝弥が縄文時代のイヌは獵犬であったと記述するなど [江坂 1957 : p. 117]、1950年代には「食用説」が否定され、「獵犬説」がほぼ定説化したことがわかる。

1965年に岡本勇は『日本の考古学』2 縄文時代の中で、イヌが獵犬の役割を担っていたとしたうえで、吉胡貝塚における人とイヌの埋葬例の割合から、1つの集落内で極めて多数のイヌが飼育されていたと述べている [岡本勇 1965 : p. 292]。イヌの飼育に関する最初の発言であるが、その具体像については触れていない。

「獵犬説」が定説となる一方で、1967年に畠山三郎太は『北海道考古学』3に「北海道天都山貝塚の始原犬」を発表し、天都山貝塚出土のイヌの頭骨の内部から石鏃が出土したこと、右眼窩に石鏃の大きさと一致する破孔があること、この頭骨が炉址から出土したことを根拠に、イヌが食用であったことを主張した。ただし、畠山は、このイヌは縄文時代早期に属するものであり、まだ十分に家畜化が進んでいない段階のものであるとしており、縄文時代のイヌがすべて食用であったとは述べていない [畠山 1967 : p. 24]。イヌが時には狩猟の対象となりえることを指摘した点は重要である。

同じく、1967年に山内清男は、1942年に発表した「縄文時代の犬小屋」を補筆し、関東地方の縄文時代の遺跡から検出される小竪穴に注目し、積極的な証拠は無いと断わりつつもこれが犬小屋であったとの仮説を提出した [山内 1967 : p. 246]。イヌの飼育形態についての具体的発言であるが、山内自身が単なる思い付きであると書いており、これをもとにして、イヌの所有などの問題には触れていない。

1970年に江坂輝弥は『考古学ジャーナル』40に「縄文時代における犬の埋葬骨格」を発表し、大正年代までのイヌの埋葬例を集成した。そのなかで、縄文時代のイヌは「番犬として、また狩猟のよき協力者として」当時の人々が可愛がっていたものとしたうえで「不安定な食料事情か、犬肉は美味であるということによるものか、食料に供し

てしまったものも多い」とイヌの役割を「猟犬説」・「食用説」のように単一に捉えず、多岐にわたったものとしている。

1973年には、直良信夫が『古代遺跡発掘の家畜遺体』を著し、その中でイヌについて触れている。直良は歯の鋭さの比較という骨学的な見地から、縄文時代のイヌには畜犬と野犬があり、野犬は狩猟の対象となっていたと推定した〔直良 1973 : p. 239〕。また、イヌの首にみられる骨折の痕をとりあげ、この原因を首輪の装着に求めた。このことから、直良はイヌが首輪をつけて、つながれて飼育されていたと述べている〔直良 1973 : p. 240〕。縄文時代のイヌの飼育形態について、事例を挙げて具体的に記した初めてのものである。ただし、首の骨折痕がどれくらいの頻度で見られる者なのかという、定量的な分析がなされておらず、その蓋然性を問うことはできない。

松浦春一郎は1975年に『船橋考古』6において、「縄文時代の犬埋葬について(5)」を発表し、千葉県栗ヶ沢遺跡に住居跡内の炉を破壊してそこにイヌを埋葬し、その後にくたたび炉を設けた事例があること挙げ、イヌの埋葬が炉や火に関わる祭祀と結びついていた可能性を指摘した〔松浦 1975 : p. 6〕。従来、イヌの役割としては「猟犬説」が多かったが、それ以外にも呪術的な役割があったことを示唆した点で重要である。

1983年に西本豊弘は『縄文文化の研究』2生業の「イヌ」のなかで、縄文時代のイヌの埋葬例を検討し、縄文時代のイヌは現在のシバイヌ程度の小型犬が主体であったことを明らかにした。また、骨折などの疾病が多くみられることや、狩猟が当時の生業の一つであったことから縄文時代のイヌは猟犬であったとした。そして、晩期にイヌの埋葬例が多くなることを指摘し、後期以降に猟犬としての役割が増大したためにイヌの墓域が形成されるようになったとしている〔西本 1983 : p. 161~170〕。イヌの骨折の原因を狩猟時の事故に求め、そこからイヌの役割を推定した点には説得力がある。

また、同年に金子浩昌もイヌと人が同じ場所に埋葬されることを指摘し、イヌに見られる屈葬例

は人の場合とは異なり、「哀惜と親愛の情の表われ」であるとした。さらに、北海道天都山遺跡のイヌの頭骨出土例が炉から出土していることから、呪術に関係するものであって食用とされたものではないとの判断をし、愛知県大曲輪遺跡や宮城県前浜貝塚に見られるイヌと人との合葬例なども考え合わせて、イヌが宗教的な意味で利用されたり、食べられたりすることがあったと指摘した〔金子 1983 : p. 11〕。イヌの埋葬例は人と同格ではないことを述べ、宗教的な意味での「食犬」を考えたことは重要である。

茂原信生と小野寺覚は田柄貝塚出土のイヌの骨を検討し、縄文時代のイヌは現生のシバイヌよりも四肢ともに強靱であることを指摘し、歯の破損例が多いことから歯の使用が激しかったとしている〔茂原・小野寺 1984 : p. 199〕。このような点は当時のイヌが「闘争性の強い小形の猟犬として、血みどろの活躍をした姿を彷彿とさせる」〔小宮 1992 : p. 24〕。

山崎京美は全国の出土状態の明らかなイヌの埋葬例22例を検討し、イヌが人の墓域に埋葬されていること、イヌにも人為的な屈葬例が存在すること、副葬品はほとんどないことを指摘し、意識的な埋葬が行なわれている以上、これらのイヌが家犬であったとしている。〔山崎 1985 : p. 27~65〕。イヌに副葬品がないということは人とイヌの埋葬原理が異なっていた可能性を示唆するものであり、興味深い。

1987年には、金子浩昌『アニマ』172の中で縄文時代のイヌについて触れ、イヌは猟犬としての役割を担っており、多くの動物にみられる犠牲獣としてのイヌの観念は当時の人々にはなかったとしている〔金子 1987 : p. 29〕。

以上のように、イヌの埋葬例そのものが問題にされるなかで、春成秀爾は愛知県伊川津貝塚の報告書中で、人の埋葬を検討する際にイヌについても触れ、イヌが人の埋葬群に帰属していることを指摘し、埋葬群が世帯に対応しているならば、イヌが世帯によって飼育されていたと考えた〔春成 1988 : p. 400〕。春成の言う世帯の内容が問題と

なるが、イヌの所有についての初めての発言であり、重要である。

1989年に金子浩昌は『考古学ジャーナル』303において、イヌが人と同じ場所に埋葬されることを再び指摘し、千葉県西広貝塚と貝の花貝塚の動物遺存体の出土量の比較から、獣骨の増加とイヌの骨の量は同じ傾向を示さないことを明らかにし、当時の狩猟のあり方を考えるうえで注意すべき点であると指摘している [金子 1989 : p. 8]。

小宮孟は1992年に「千葉県木戸作貝塚における切断加工痕のあるイヌ下顎骨」を発表し、当時のイヌが先天的な理由で猟犬から外されることがあるのならば、イヌが他の用途に転用された可能性があると、イヌの役割の多様性を説明している。また、アニミズム的な儀礼にイヌが用いられた可能性を指摘している [小宮 1992 : p. 25]。

山田康弘は「縄文時代のイヌの役割と飼育形態」『動物考古学』1の中で、東日本のイヌの埋葬例を検討し、これらが多くの場合、成人男性骨に近接して埋葬されていることから、両者がより密接な関係を持っていたと考えた。そして、世界の民族事例における性別による分業を参考にし、縄文時代のイヌは猟犬としての役割が高かったと推定した。また、イヌが人の埋葬小群の構成要素となっていることから、イヌが世帯によって飼育されていたと考えた。[山田 1993 : p. 8~10]。

以上の研究にみられるように、縄文時代のイヌは多くの場合、猟犬としての役割を担っており、世帯によって飼育されていたと考えられている。縄文時代の生業の一つが狩猟であり、その主たる対象がイノシシとシカである以上 [西本 1991 : p. 130]、イヌが猟犬の役割を担っていたと考えるのは当然であろう。イヌの役割が猟犬だけではなく、その他の用途があったらしいこともすでに指摘されており、その役割自体がかなりの多様性を持っていたと考えられる。

### 他の時代の考古学資料によるイヌの役割と飼育形態

縄文時代のイヌがどのような形で狩猟に使われ

ていたのか、また、世帯が飼育していたのならばどのような方法で飼育していたのかという点については、はっきりとは解明されていない。縄文時代にはイヌの埋葬例は多く出土するが、イヌが表現された考古資料はほとんどない。そこで時代は異なるが、弥生・古墳時代の資料を参考にして、当時のイヌの役割と飼育形態について考えてみることにする。

弥生時代の伝香川県出土の銅鐸には5匹のイヌに囲まれたイノシシを1人の狩猟者が射るという場面が表わされており、当時いわゆるイヌヤマの狩があったことを示唆している [千葉 1975 : p. 5]。また、鳥取県東伯郡泊村出土の銅鐸には、狩人に追われて逃げるシカをイヌが追いかけている場面が描かれている [江坂 1970 : p. 1]。これらの事例は狩猟時には複数のイヌが猟犬として用いられたことを意味する。縄文時代にも茨城県小山台貝塚や [金子 1976 : p. 90]、千葉県高根木戸貝塚 [八幡他 1971 : p. 275~282]、矢作貝塚 [清藤 1981 : p. 135]などでイヌの合葬例が出土していることから、1時期に複数のイヌが飼育されていたことが明らかであり、イヌヤマのような狩猟方法が採られていた可能性がある。

古墳時代の形象埴輪の配列にはイヌを用いた狩猟の場面を表わしていると考えられるものがいくつか存在する。奈良県天理市の荒寺古墳からはイヌがイノシシに近接して配列されていた [平野 1993 : p. 84]。群馬県佐波郡境町剛志天神山古墳の場合には2匹のイヌが1匹のイノシシを挟んで配置されていた [橋本 1980 : p. 343]。群馬県群馬町保渡田Ⅷ遺跡の場合にはイヌとイノシシが近接しているだけではなく、イノシシが矢を受けて出血しているところまで表現されている [若狭他 1990 : p. 132]。福島県安達郡本宮町の天皇壇古墳では尻尾を巻き、耳を立て、足をふんばっているイヌが親子のイノシシと対決するように配列されている [山崎他編 1984 : p. 42]。千葉県成田市龍角寺101号墳ではシカに近接して、イヌが配列されている [安藤 1988 : p. 165]。同様な事例は埼玉県行田市瓦塚古墳においても出土している [若松・日高 1993 : p. 11]。これらの事例が橋本の指摘するよ

うに狩猟の場面を表わしているとすれば [橋本 1993 : p. 21], その性格は別として当然, イヌは猟犬としての役割を果たしていたものと推定できる。

ここで指摘しておきたいのはイヌはシカよりもイノシシと組み合って表現される場合が多いという点である。福島県山ノ神遺跡出土の縄文時代晩期の狩猟文線刻礫には角の生えたシカを狩人が一人で担っている場面が描かれている [上野・荒川 1993 : p. 39]。伝香川県出土銅鐸のイノシシ猟の場面とは対象的である。これと同じモチーフで狩人が一人でシカを射る場面は弥生時代の伝香川県出土銅鐸にも描かれており, 古墳時代にも奈良県天理市荒蒔古墳出土の大刀形埴輪や [平林 1992 : p. 61], 京都府水内古墳出土の円筒埴輪などにも描かれている [設楽 1993 : p. 76]。この場合, シカが神獣としての意味を持っていたかどうかは問題となるが, 実際の狩猟の場面をそのまま写したものであれば, シカ猟とイノシシ猟ではイヌの使用の仕方が異なっていた可能性がある。

大阪府巨摩磨寺からはイヌが繰り返して噛みつけた痕の付いている弥生時代後期の鉢形土器が出土している [宮崎 1981 : p. 319~320]。この歯形は土器の焼成前に付けられたものらしく, 粘土が一部歯形にそって張り出している。報告書の宮崎泰史は, イヌのこのような噛みつき行為は動物行動学的には「くつろぎ行動」として捉えられるものであり, 歯の形状から若獣のものであるとしている。ここで注意しておきたいのは, 焼成以前の土器にくつろぎ行動と考えられる噛み痕が残されていた点である。「くつろぎ行動」はまさにイヌがリラックスしている状態の時に見られるものであり [ツィーメン, 白石訳 1977 : p. 50], そのような状態のイヌが製作過程にある土器の傍にいたことができたということは, 普段イヌを縄などにつないだり, 小屋に入れたりなどして, 行動を規制していたのではないことを示唆する。つまり, 当時のイヌは放し飼いであった可能性が高い。

一方で大阪府亀井遺跡などから弥生時代中期の解体されたイヌが出土していることから, イヌが

食用にされていたことも指摘されている [高島他 1983 : p. 70]。当時の食生活の上でイヌの肉がどれだけの位置を占めていたのか検討できないが, 食用に飼育していたのならば, イヌの行動を管理する必要性から, つないだり, 小屋に入れたりしていたかもしれない。縄文時代のイヌは食用ではないことから, その行動を極端に制限することはなかったと考えられる。その意味では, 放し飼いにされていた可能性が高い。

また, 古墳時代のイヌの埴輪には奈良県荒蒔古墳出土例や [平野 1993 : p. 84], 群馬県剛志天神山古墳出土例のように首輪をしているものがあり [平野 1993 : p. 55], 当時のイヌがつながれて飼育されていた可能性がある。しかし, 群馬県保渡田Ⅶ遺跡出土のイヌの埴輪や [若狭他 1990 : p. 61], 群馬県境町出土のイヌの埴輪のように首輪をしていないものもあり [三木編 1967 : p. 60], 即断はできない。

以上の事例から想像するに, イヌは縄文時代の場合には放し飼いであり, これを食料とするようになった弥生時代に縄につないだり, 柵などで囲って飼育することが始まったのではなかろうか。イヌの行動を制限することは, 犬飼部の存在などから推定されるように, 古墳時代以降次第に強化されていったのであろう。ただし, 放し飼いいえども良い猟犬を育てる必要性から, ある程度は何らかの形で管理はされていたと思われる。その意味で注目すべき見解がある。茂原信生と小野寺覚は縄文時代の後期の東北地方には平均値よりも明らかに大きいイヌが存在していたことを明らかにし, その由来を「集団内で選択された個体である」としている [茂原・小野寺 1984 : p. 207]。もし, これが事実ならば, 当時の人々はすでに動物の遺伝的形質についての知識を持ち合わせていたことになる。これに関連して, 当然性行為が繁殖につながることも知っていたはずである。だとすれば, イヌはかなりその行動が制限されていた可能性がある。今後の資料の増加を待って改めて検討してみたい。

## 獵犬以外のイヌの役割

イヌの役割としては獵犬としての面が強調されてきたが、獵犬だけでは割り切ることのできないイヌの出土事例がいくつか存在する。この点についてはすでに何人かの先学が指摘してきたところでもあるが、ここではそのような事例をいくつか挙げることにする。

宮城県前浜貝塚では青年女性人骨の顔面の上にオスの成犬が乗せられていた〔小井川 1979 : p. 9〕。この女性人骨が埋葬された土壌に接して月齢10カ月の胎児骨を収納した甕棺が1基出土した。土壙内と甕棺内から同一個体の土器片が出土したことから、この両者はほぼ同時期に埋葬されたと思われる。両者の位置的な関係からみて、この青年女性は妊産婦であったと推定できる〔山田1994〕。前浜貝塚では妊産婦とイヌが合葬されていた。

愛知県吉胡貝塚では19号熟年女性人骨の四隅にイヌが埋葬されていた〔久永 1952 : p. 59〕。この19号人骨には赤色顔料が振りかけられており、右手に4個左手に7個の貝輪をはめていた。このような埋葬例は33体出土した人骨のなかでも13号人骨と19号人骨だけであり、この両者は特殊な埋葬例であったことがうかがわれる。吉胡貝塚では、このような特殊な埋葬例の四隅にイヌが埋葬されていた。

なお、吉胡貝塚のような事例は同じ愛知県の伊川津貝塚でも出土している〔斎藤・久永 1972 : p. 27~28〕。

千葉県木戸作貝塚では、27号住居跡に埋葬された1号成人女性人骨に、切断されたイヌの下顎骨が副葬されていた〔小宮 1992 : p. 28〕。

以上のイヌの出土例は単に獵犬であったとするだけでは割り切れないものであり、その役割として出土状況から察して、呪術的なものがあったと判断できる。事例的には少ないが、共通することはイヌが全て女性に伴出していることである。獵犬として男性とのつながりがあった以外に、呪術的な部分で女性とのつながりがあったのかもしれない。このことは埋葬されたイヌがすべて獵犬であったのかという問題を提起する。今後、考古学的な検討が一層重要になるだろう。

## おわりに

以上、縄文時代のイヌについて私見を述べてきた。これをまとめるならば、次のようになる。当時のイヌはもっぱら獵犬としての役割を担うことが多かったが、一方で呪術的な意味もあわせ持っていた。また、イヌは世帯によって複数飼育され、放し飼いにされていた。この2点である。

この研究ノートを書くにあたって筑波大学歴史人類学系の西野元先生、西田正規先生、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生に御助言を賜った。また、筑波大学歴史人類学系の佐野賢治先生、福島県立博物館の菊池健策先生には民俗学的な見地からの御教示をいただいた。筑波大学歴史人類学研究科の日高慎、田中裕の両氏には適切なご教示をしていただいただけでなく、文献の紹介もしていただいた。最後ではあるが記して感謝いたします。

## 参考文献

安藤鴻基

1988「総括」『竜角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』、千葉県教育委員会。

上野修一・荒川竜一編

1993『選ぶ・割る・磨くー旧石器時代から古墳時代までの人と石とのかわりー』、栃木県立博物館。

江坂輝弥

1957『考古学ノート』2 縄文時代、河出書房。

1970「縄文時代における犬の埋葬骨格」

『考古学ジャーナル』40。

江見水陰

1909『地中の秘密』、博文館。

小井川和夫

1979『前浜貝塚』、本吉町教育委員会。

岡本 勇

1965「労働用具」『日本の考古学』2 縄文時代、河出書房。

金子浩昌

1976「自然遺物」永松実他編『小山台貝塚』、図書刊行会。

- 1983「イヌは良き友だった」『アニマ』121。  
 1987「縄文人にいつくしまれたイヌ」  
 『アニマ』172。  
 1989「縄文時代のイヌ」『考古学ジャーナル』303。
- 清野謙次  
 1925『日本原人の研究』, 岡書院。
- 小宮 孟  
 1992「千葉県木戸作貝塚における切断加工痕のあるイヌ下顎骨」『千葉県立中央博物館人文科学研究報告』2-1。
- 斎藤嘉彦・久永春男  
 1972「B区」伊川津貝塚編集委員会編  
 『伊川津貝塚』, 渥美町教育委員会。
- 酒詰仲男  
 1961『日本縄文石器時代食料総説』, 土曜会。
- 茂原信生・小野寺寛  
 1984「田柄貝塚出土の犬骨について」  
 『人類学雑誌』92-3。
- 清藤一順  
 1981『矢作貝塚』, (財)千葉県文化財センター。
- 設楽博己  
 1993「古墳時代人の造形と絵画」国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』, 朝日新聞社。
- 高島 徹・広瀬雅信編  
 1983『亀井』, (財)大阪文化財センター。
- 田中茂穂  
 1904「記念遠足会採集品中動物諸類に就て」  
 『東京人類学雑誌』224。
- 千葉徳爾  
 1975『狩猟伝承』, 法政大学出版局。
- ツィーメン.E 白石 哲訳  
 1977『オオカミとイヌ』, 思索社。
- 土岐(酒詰)仲男・竹下次作  
 1936「神奈川県都筑郡中川村山田字西ノ谷貝塚に於ける埋葬されたる犬の全身骨格発掘に就いて」『史前学雑誌』8-2。
- 直良信夫  
 1973『古代遺跡発掘の家畜遺体』, (財)日本中央競馬会弘済会。
- 西本豊弘  
 1983「イヌ」『縄文文化の研究』2 生業, 雄山閣。  
 1991「縄文時代のシカ・イノシシ狩猟」  
 『古代』91。
- 長谷部言人  
 1924「日本石器時代家犬に就て(追加)」  
 『人類学雑誌』40-1。  
 1952「犬骨」斎藤忠編『吉胡貝塚』, 吉川弘文館。
- 橋本博文  
 1980「埴輪祭式論」『塚廻り古墳群』, 群馬県教育委員会。  
 1992「古墳時代後期の政治と宗教—人物・動物・埴輪にみる政治と宗教—」『日本考古学協会1992年度大会研究発表要旨』, 日本考古学協会。  
 1993「埴輪の語るもの」『はにわ—秘められた古代の祭祀』, 群馬県立歴史博物館。
- 畠山三郎太  
 1967「北海道天郡山貝塚の始原犬」『北海道考古学』3。
- 濱田耕作・島田貞彦・長谷部言人  
 1921『薩摩国出水郡出水町尾崎貝塚調査報告』, 京都帝国大学文学部考古学研究報告6。
- 春成秀爾  
 1988「埋葬の諸問題」小野田勝一他編  
 『伊川津遺跡』, 渥美町教育委員会。
- 久永春男  
 1952「第一トレンチ西半区域及び第四トレンチ」斎藤忠編『吉胡貝塚』, 吉川弘文館。
- 平林章仁  
 1992『鹿と鳥の文化史』, 白水社。
- 平野進一  
 1993『埴輪—秘められた古代の祭祀』群馬県立歴史館。
- 松浦有一郎  
 1975「縄文時代の犬埋葬について(5)」  
 『船橋考古』6。

宮崎泰史

1981「巨摩廃寺より出土した咬痕のみられる土器片について」(財)大阪文化財センター編『巨摩・瓜生堂』,大阪府教育委員会。

Morse, E. S. 近藤義郎・佐原真訳

1983『大森貝塚』,岩波文庫。

山崎京美

1985「縄文文化におけるイヌの埋葬について」『国学院雑誌』86-2。

山崎義夫

1984『天王壇古墳』,本宮町教育委員会。

山田康弘

1993「縄文時代のイヌの役割と飼育形態」『動物考古学』1。

山田康弘

1994「縄文時代の妊産婦の埋葬」『物質文化』投稿中。

山内清男

1942「石器時代の犬小屋」『民俗文化』3-8。

1967「石器時代の犬小屋」『山内清男先史考古学論文集』5。

若狭徹他

1990『保渡田Ⅶ遺跡 保渡田古墳群に関する遺構群』,群馬町教育委員会。

若松良一・日高 慎

1993「形象埴輪の配置と復元される葬送儀礼(中)一埼玉瓦塚古墳の場合を中心に」『調査研究報告』6,埼玉県立さきたま資料館。

## 新刊紹介

坂出祥伸・福井文雅・山田利明・野口鐵郎編

### 『道教学典』

中国では道教に関する事典がすでにいくつか出版されているが、本書は日本で編まれた最初の本格的道教学典である。1135項目にわたって教理、経典、思想、文学、儀礼、方術、神仙、教派、人物、歴史などを網羅し、付録に中国道教の現状を大陸篇(蜂谷邦夫)台湾篇(丸山宏)に分けて解説し、道蔵番号対照表を付す。事典の使い勝手の決め手になる索引は事項分類もされており、事項の選択は入門者が使うにも適切である。この事典の下地となるのは1983年に完結した『道教』全3巻で、ここから多くの項目が選ばれている。事典の記述よりさらに詳しい内容を調べ、項目末尾の文献を補う文献一覧を参照することができる。『道教』の完結以降の

大陸における実地調査や台湾、ベトナムなどの資料が生かされている。例えば、台湾の道士はシペール、ラガウェイ、大淵らがとりあげた陳氏以外の事例が加えられている。そうした調査資料を踏まえて、文献による解説に偏らない配慮がなされているのも、本書の特徴といえよう。それだけ日本の道教研究が深まりを見せていることが知られる。いわゆる民衆道教に関しては、教理、経典のどの部分がどのように民衆に受容され、変容しているのか、といった点が事典の性格、紙数の制限により十分にふれられなかったように思われる。(古家信平)

B5判 804頁 平河出版社  
1994. 3月刊 10,000円(外税)